

観光資源保護におけるナショナル・トラスト

活動の役割について、私たちの提案

文化を守る新しいナショナル・トラストの提案 —東洋の文化の発信基地、神田神保町を事例として—

明治大学政治経済学部新田功ゼミナール B チーム
落合 良・稲澤俊明・上田祐介・高橋辰之・福島一郎

目 次

要約と提案

I 神田神保町の魅力

- [1] 明治時代から発展した神保町
- [2] 学生街として文化を発信してきた神保町
- [3] 東京の中心にある神保町

II 地域活性化の取り組み

- [1] 盛んな地域活性化活動
- [2] 学生の取り組み

III 私たちの提案：「神保町に入口をつくろう」

- [1] 私たちが考える神保町の課題
- [2] 私たちが考える提案「神保町に入口をつくろう」
- [3] 提案から考えるナショナル・トラスト活動の役割

IV 結論

要約と提案

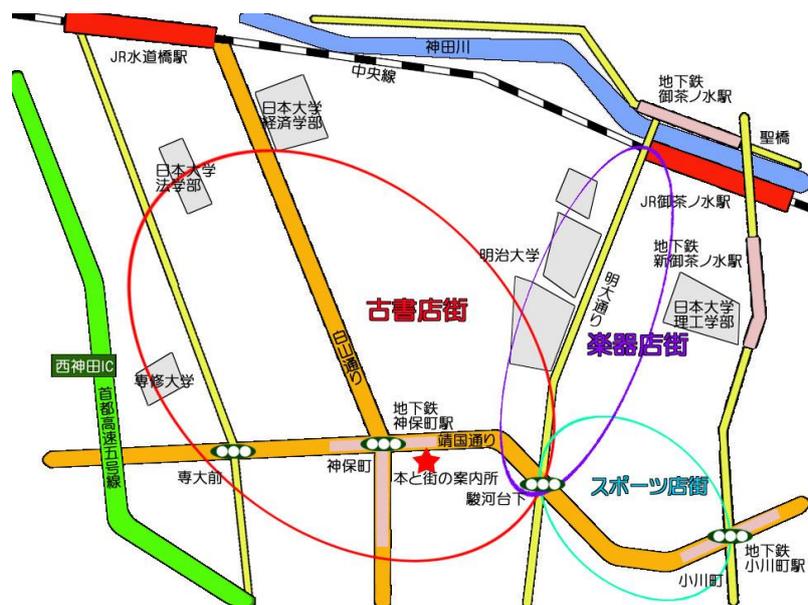
神田神保町（以下、神保町と略称）はさまざまな顔をもつ街である。歴史ある大学の学生街、出版社の集まる街として教養の街でありながら、古書店街、楽器店街、スポーツ店街、食の街など、趣味の街としての一面もある。狭い地域でこれだけの顔をもちながらすべてが緩やかにまとまっている街、これが神保町の魅力であり、この街が文化を発信し続けてこられた理由であるといえる。この論文では、こうした神保町の魅力を踏まえたうえで、日本だけでなく世界に誇る東洋の文化発信基地としてこの街が発展していくための提案を行う。この提案の核となるのが、生み出され続ける文化を守るという、新たな役割をもつナショナル・トラストの構築である。

本論文の構成は以下のとおりである。最初に、神保町の魅力を歴史、文化発信、地理の三点から分析する。次に、神保町でこれまでに取り組まれてきた代表的な地域活性化活動を再検討する。この再検討からみえてきた、神保町の総合的な情報発信が不十分であること、地域をまとめる組織が欠如していること、という二つの課題を解決するために、多言語対応の web サイトによる情報発信の強化と、ナショナル・トラストの結成による地域団体の組織化・活動の拡大を提案する。最後にこの提案から私たちが考える新しいナショナル・トラストの役割、つまり文化財や環境など、目に見えるものだけでなく、常に生まれ続ける文化（＝人びとのライフスタイル）を守るという新しい役割について述べる。

I 神田神保町の魅力

本節では多面性のある神田神保町（以下、神保町と略称）の魅力について、歴史、文化発信、地理の三点から考察する。

資料1 神田神保町周辺地図



(資料出所) 筆者作成。

[1] 明治時代から発展した神保町¹

日本一の古書店街である神保町は、明治時代からさまざまな転機を迎えつつ現代に至っている。ここでは、神保町の歴史をたどることによって、この街の特徴を明らかにする。

(1) 「古書店街」神保町の形成

江戸時代初期は、京都が出版の中心となっていた。しかし、江戸時代後期から明治時代にかけて、江戸における出版数が増加していった。そして、明治時代に入り東京遷都や廃仏棄釈によって公家の力が衰えたり、新時代に適した著者が東京に集中したりしたことで、出版の中心は完全に東京に移った。その中で、神保町が発展してきた要因として挙げられるのは、幕末までこの地域に武家屋敷が集中していたものの、倒幕に伴い大名や旗本が一斉にこの地域を離れ、広大な空き地ができたことである。さらに、明治初期に政治運動が強くなると、法律の研究や議論が盛んになった。そのため、学校の需要が高まり、この周辺に集中して学校が設立された。すると、書物に対する需要が高くなり、多くの出版社や古書店ができ、現在の神保町の基礎ができた。

明治時代後期になると、東京書籍商組合が組織され、有志による大市が開かれた。そこでは新古書の取引が行われ、さらに明治 35 年に組合規則を改正すると、正式な組合業務として取引が行われるようになった。そして、明治 39 年には市電が走るようになり、靖国通りが拡大され、周辺に古書店が急増し現在の古書店街の原型となった。

(2) 神保町を襲う試練

大正時代に入ると古書の取引数はさらに増加し、他の古書店から需要の高い本を買ったり、同業者が本を持ち寄って交換を行ったりした。大正 9 年に東京古書籍商組合が設立されるとこのような取引が組織化され、古書店はさらに増えていった。一方で、神保町は試練の時期を迎えることになった。大正 2 年の大火や、同 12 年の関東大震災により、一帯が焼け野原になってしまった。それでも、他の地域から本を収集すれば営業できるという古書店の特徴を活かし、神保町はたくましく立ち直った。

古書店街は運よく第二次世界大戦の戦火を逃れたが、終戦直後は本を売りに来る人が多く、資金集めが困難であった。しかし、新制大学が設立されるようになると書物の需要は高まり、古書店街は徐々に立ち直った。昭和 30 年代に出版界が復旧すると、古書人気は停滞気味になった。そこで行われたのが「神田古本まつり」であり、これは昭和 35 年に第 1 回が開かれてから現在まで半世紀にわたって行われている行事である。また、バブル期に神保町は地上げ屋の標的となったが、地域で団結してこれに抵抗し、多くの古書店が残った。このように、神保町はさまざまな困難を乗り越えて、昔の街並みを残しつつ現在に至っている。

¹大内田鶴子、熊田俊郎、小山騰、藤田弘夫編『神田神保町とヘイ・オン・ワイ 古書とまちづくりの比較社会学』東信堂、2008 年。

(3) 神保町の特徴

このような歴史の下に形成されてきた神田神保町には三つの特徴がある。第1に、学生が集中し、学生文化が育まれてきたことである。明治以降多くの大学が建てられ、多数の学生が集まったこの地域では、需要に応じて書店だけではなくさまざまな文化が集積されてきた。第2に、江戸時代からの街並みが残されているという点である。神保町の本町通りは、書物を日照から守るために靖国通りの南側に並んでいるが、このような街並みは江戸時代にできたもので、当時から珍しい存在であった。このようにして、現在の神保町の本町通りは江戸以来の街並みの形式を保っている。第3に、民間主導で町が発展してきたことである。神保町の本町通りは近代的な都市計画とは関係なく形作られ、近隣関係を基礎にした強力な同業組合によって守られてきた。また、専門性が高く正規の教育からは関係が薄い書物を扱う店が多かったため、神保町の本町通りは公教育と異次元にある分野で文化的創造を擁護・維持してきたのである。

[2] 学生街として文化を発信してきた神保町

神保町には本町通りだけでなく、周辺には JR 御茶ノ水駅周辺から明大通り沿いの楽器店街、靖国通り沿い小川町のスポーツ店街といった世界有数の専門店街が存在する。楽器店街における主要な店である下倉楽器、石橋楽器、谷口楽器の3社の創業は1930年代である。現在では上記3社の本店・系列店に加え、クロサワ、BIGBOSS などの大手チェーン店の支店などが30店以上も集積しており、単純に店数だけを比較しても東京の楽器店街の中で渋谷を凌ぐ一番の激戦区である。スポーツ店街は太平洋戦争後に集積し始めたといわれており、こちらも現在は50店以上が軒を連ねる²。楽器店街、スポーツ店街ともに周辺地域の学生の需要を満たすように専門店が集積を始め、次第に

資料2 明大通りの楽器店の様子



資料3 靖国通りのスポーツ店の様子



(資料出所) 両写真とも筆者撮影。

²神田スポーツ用品店協会 HP (<http://sports-kanda.com/goaisatsu.html>)

専門店街として有名になっていった歴史を有する³。

これら専門店街の特徴として、豊富な品揃えと専門性の高さが挙げられる。スポーツ店ではミズノ、ヴィクトリア、楽器店ではクロサワや下倉といった品揃えの豊富な店が存在する一方で、個人経営の店であってもそれぞれに特化した分野（例えば谷口楽器店は左利き用のエレキギター）において豊富な在庫をもっていることが多い。また、同じ音楽関係として、楽器だけではなく、中古レコード店や音楽をテーマとする喫茶店・バーなども集結しており、神保町の文化に奥行きを加えている。さらに、オーダーメイド商品を取り扱う専門性の高い店も多く、特にスポーツ用品店の中にはスポーツ用インソール専門店の「RunDesign」、ランニングに関する総合サポート店の「セカンドウインドAC」といったトップアスリートも利用する店まである⁴。

これらのことに加えて、神保町周辺は学生街であるゆえに 1000 円前後で食べられる B 級グルメが豊富にあることがこの街の特徴である。カレー店や中華料理店が多く、日本で初めて冷やし中華をメニューに乗せた「揚子江菜館」、孫文や周恩来が通った中華料理店「漢陽楼」、明治 42 年創業の洋食店「ランチョン」など、日本の食文化の老舗といわれるような店もある。さらに神保町から一歩足を延ばせば、須田町から淡路町にかけて「やぶそば」、「まつや」、「ぼたん」など、歴史のある飲食店が多い。

[3] 東京の中心にある神保町

神保町は、交通の便が良く、人の流れが活発である。日本の中枢機能を担う千代田区内に立地し、区内の昼間人口は、港区の 91 万人に次いで 2 番目に多い 85 万人である（平成 17 年国勢調査）。神保町はその中にあるため、アクセス手段は多様かつ容易である。電車は 7 路線が利用可能で、東京駅や新宿駅など東京の中心的な駅からの移動に抵抗を感じることはない。

神保町へのアクセスには上記のように 7 路線が利用可能で、都営地下鉄三田線・新宿線神保町駅、東京メトロ半蔵門線神保町駅、JR 中央・総武線御茶ノ水駅、東京メトロ丸ノ内線御茶ノ水駅、JR 中央・総武線水道橋駅、東京メトロ千代田線新御茶ノ水駅がある。オフィス、大学など人を集積する施設が近辺に立地しているため、これらの駅に足を運ぶ人の数が非常に多い。神保町付近の駅への 1 日平均の乗車人数は、54 万 4500 人程度と推定される（各社の HP から 7 路線の 2010 年度の 1 日平均の乗車人数を合計）。日々、いかに多くの人が神保町の周辺を移動しているかがわかる。

以上のように、周辺地への行き来が容易で、人の移動に便利な立地環境であるために、神保町には、都心のビジネスマン、学生が数多く通っている。また、神保町は訪日外国人観光客にとっても優しい立地的条件を兼ね備えている。第 1 に、空港からのアクセスに優れている。羽田空港からは

³ナビブラ神保町「神保町～小川町にスポーツ用品店が多い訳？」

(http://www.navi-bura.com/mains/sports_inoue.html)

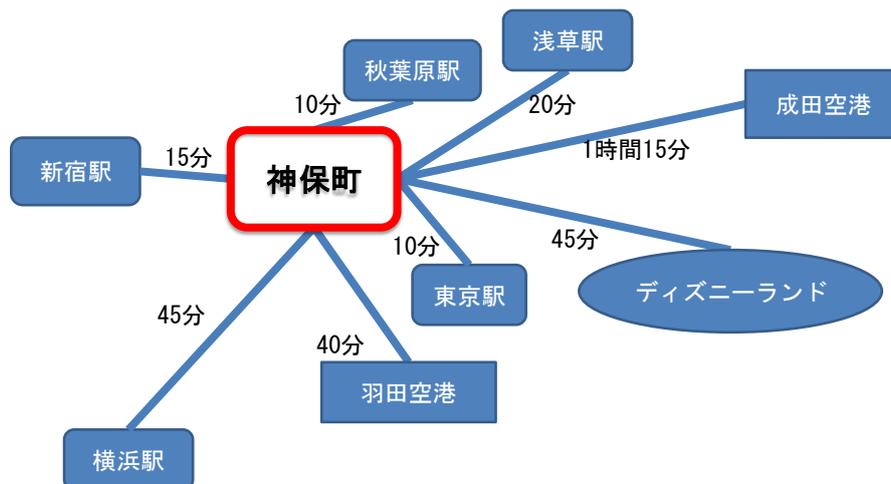
ナビブラ神保町「ビックボスー神保町～御茶ノ水楽器屋さん特集」

(<http://www.navi-bura.com/mains/gakki-s02.html>)

⁴神田古書店連盟『神保町公式ガイド Vol.2』メディア・パル、2010 年、26～33 頁。

40分、成田空港からは1時間15分程度と、空港利用者にとっても訪れやすい街だといえる。第2に、都心にあるため、有名観光地からの移動が容易である。外国人観光客に人気の浅草、新宿、秋葉原から近い。東京ディズニーランドや横浜から45分程で来街できる。また、外国人観光客が都内のホテルに宿泊しているならば、神保町からの移動も容易である。したがって、神保町は潜在的に訪日外国人観光客を取り込める地理的条件をもっているといえる。

資料4 主要駅・主要空港から神保町までの所要時間



(資料出所) Google 乗換案内より筆者作成。

II 地域活性化の取り組み

前節で明らかなように、神保町は観光地として高いポテンシャルをもった、魅力的な地域である。神保町が魅力的な地域であるもう一つの要因として、盛んな地域活性化の取り組みを挙げることができる。本節ではこの点について考察する。

[1] 盛んな地域活性化活動

神保町では多くの取り組みがなされているが、そもそも神保町がある千代田区は観光に力を入れており、誰もが訪れたくなり、地元の人たちが誇れるまちづくりを目指している。実際、千代田区は政策として千代田区観光ビジョンを掲げている。これはシティーイメージを向上させ、千代田区の魅力を高める観光まちづくりを地域全体で総合的に展開していくことを目標とするものである。

千代田区の最近の取り組みの主要なものとして、観光に関する実態調査(2004年)、学識経験者、地域の観光事業者、事業者団体、文化施設の関係者等によって構成される「千代田区観光まちづくり懇談会」の発足(2005年)などがある。また、千代田区には、「千代田区まちづくりサポート事業」というまちづくり団体に助成金を出して支援する制度があるが、この助成金を受け取った団体

は今までに 27 団体（2011 年 12 月 6 日現在）ある。このことから千代田区内ではさまざまな団体によるまちづくり活動が盛んであることがうかがえる⁵。

このように地域活性化活動に力を入れている千代田区であるが、神保町ではどのような地域活性化活動への取り組みが行われているのだろうか。ここでは神保町における代表的な取り組みとして、「本と街の案内所」と神保町の情報発信をしている web サイトを取り上げる。

「本と街の案内所」は神保町に関する情報を総合的に提供する拠点として、2007 年にオープンした。この案内所は、本探しだけでなく神保町の奥深い世界を楽しむための情報提供をすることを目的としており、NPO 法人連想出版や神田古書店連盟などいくつかの団体によって共同で運営されている。神保町の古書店は特定の専門書だけを扱っているため、来街者は、どこの店に行けばいいのかかわからず、逆に店主側も扱っていないジャンルの本について回答することが難しく、双方から現在の案内所のような施設を望む声が出ていた。しかし、場所も予算も人員もなく、なかなか実現しなかった。そうしたなかで、たまたま現在のスペースに空きができ、神田古書店連盟による家主との交渉や神保町を拠点とする各団体との協力が得られたので現在の案内所開設に至った。神保町交差点近くに立地する「本と街の案内所」では、近くの千代田区図書館から派遣されたコンシェルジュなどのスタッフが「本を真剣に探している人に、一緒にその本を探すサービス」を行っており、書店などの案内を行っている。なお、案内所は基本的に日本語対応のみであるが、外国人も多ければ週に 4~5 人程訪れる。しかし、あくまで本を探す人向けのサービスを提供する場なので観光案内所的な外国人向けサービスは行っていない。また、外国人向けに現在のサービスを提供したくても、語学力などの障害があるために実現は難しいとのことである。

web サイトについては二つの代表的なサイトを取り上げる。一つは本、食、街を主軸にした神保町のタウンガイドとなっており、神保町のさまざまな魅力を紹介している「神保町へ行こう」⁶というサイトである。もう一つは神田古書店街のオフィシャルサイト「Book Town じんぼう」⁷であり、このサイトは神保町の古書店約 180 店、古書約 10 万冊をデータベース化し、古書の検索を容易にしている（この検索は先に紹介した「本と街の案内所」で利用可能になっている）。これらの古書店街の活動には、NPO 法人連想出版以外にも多くの団体などが関わっている。この他の取り組みとして、神保町周辺の店を紹介した「ナビブラ神保町」⁸というサイトや、神田古書店連盟が発行しているガイドブック『神保町公式ガイド』がある。後者は古書店だけでなく、周辺の楽器店や飲食店の情報も提供している。

また、NPO 法人連想出版への e メールによる取材で、古書店街が神保町の積極的な観光地化を望んでいないことも明らかになった。理由の一つには古書店のビジネスモデルがある。古書店の売上に占める店頭販売の割合は低く、同業者同士の古本交換会での取引、古書目録による通信販売、近年ではネット販売が、売上の大きな割合を占めている。また、古書店で扱う古本の中には単価が高

⁵千代田区観光協会 HP (<http://kanko-chiyoda.jp/tabid/73/Default.aspx>)

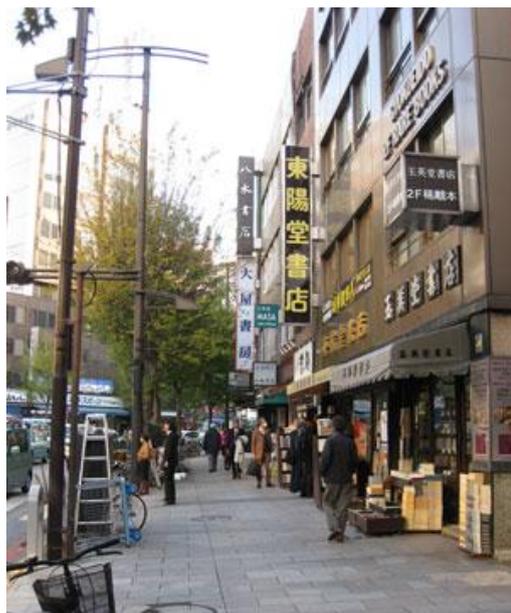
⁶神保町へ行こう (<http://go-jimbou.info/>)

⁷Book Town じんぼう (<http://jimbou.info/>)

⁸ナビブラ神保町 (<http://www.navi-bura.com/jimbocho/>)

いものもある⁹。古本の中にはいわゆる「一点もの」の重文級、博物館級の文化財もある。こうした理由から、新刊書店や新古書店（ブックオフなど）とは異なり、古書店は、大勢の顧客を取り込む必要性がなく、電子書籍の普及などで多様な本を容易に入手できる状況にでもならない限り、観光地化するメリットは少ない。このような背景があったからこそ、神保町の古書店街には個人経営の専門店が緩やかに連携しながら、各団体や企業がやりたいことに主体的に取り組んでいる独特の雰囲気街を覆っていると考えられる。

資料5 靖国通りの古書店街の様子



資料6 本と街の案内所



(資料) 両写真ともに筆者撮影。

[2] 学生の取り組み

上記のような活動以外に、大学や学生が主体となって取り組んできた地域活性化活動もある。ここでは、神保町で近年行われた二つの学生の取り組みを取り上げる。

(1) カレープロジェクト¹⁰

明治大学商学部が平成17年度より、学生と地域の人びとの連携から互いが活性化する相互関係を実現することを目的に掲げて、「広域連携支援プログラム—千代田区=首都圏 ECM」を立ち上げた。このプログラムは文部科学省が公募する現代GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選出され、同省からの支援を受けた活動である。このプログラムのプロジェクトの一つが、2008年に商学部の大友ゼミナールが行った「カレープロジェクト」である。このプロジェクトでは、神保町に多

⁹山田直哉『食い逃げされてもバイトは雇うな』光文社新書、2007年、138～152頁。

Business Media 誠「古書店主が語る、ネット時代の古本ビジネス」

(<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1010/06/news014.html>)

¹⁰明治大学商学部『明治大学商学部広域連携支援プログラム活動報告書2007』2008年。

く集まっているカレー店を売り出すための研究を行った。そして、街の活性化のために神保町カレーマップを制作することにし、実際に神保町にあるカレー店を取材し、『御茶ノ水・神保町カレエコMAP』というフリーペーパーを発行した。このフリーペーパーはカレー店だけでなくエコについての記事も載せている。その理由は、千代田区の昼間人口が多いので大量のゴミや空調、自動車などによるCO₂排出が環境にも影響を与えていることを周知する狙いがあったからである。このカレーとエコを結びつける発想から、学生が企業や地域の人と清掃活動を行い、その後カレーを食べながら交流を図る「カレエコ～ちよだは地球とともだちよ～」というイベントを実施した。

(2) 「まちの図書館」プロジェクト¹¹

「まちの図書館」プロジェクトは、世界最大の書籍集積地である神保町のまち全体を図書館に見立てたまちづくりを構想するものである。主体となったのは、NPO 法人神田学会と、神保町にゆかりのある5大学（共立女子大学、東京電機大学、日本大学、法政大学、明治大学）の学生や教員が集まって結成したインターユニバーシティ神田という団体の二つであり、2006年夏から約9カ月間にわたり、古書店街の現状調査や古書店主への意識調査、シンポジウム、公開セミナーなどを行い、最終的な成果を『KANDA ルネッサンス』別冊として公表した。このような活動を受けて出版社や書店などが「神保町を元気にする会」を結成し、商工会議所千代田支部が「神保町活性化委員会」を発足させるなど、このプロジェクトが地域の人たちに意識の変化をもたらし、活性化への取り組みを推進するようになった。

学生が参加した上記の二つの事例では、学生自らが積極的に活性化活動に参加していた。カレープロジェクトの事例では学生が実際にカレー店を取材し、地域の人も参加したイベントを実施した。「まちの図書館」プロジェクトでは、知の拠点・観光拠点として神保町のまちづくりをすすめるために、学生自らが調査・分析し、それぞれが独自の提案を行なうことで、地域の人たちの意識を変えることができた。

Ⅲ 私たちの提案：「神保町に入口をつくろう」

[1] 私たちが考える神保町の課題

以上の考察から、神保町が観光地として高いポテンシャルをもつとともに、地域の人びとによる活性化の活動も盛んであることが明らかである。私たちは、観光地として神保町がさらに発展していくためには、神保町全体の総合的な情報発信と、諸団体の組織化、この二点がこれから取り組むべき課題であると考えます。

神保町は「古書や楽器、スポーツ用品店の集中するエリア」として有名である反面、事前に必要な知識を備えていないと来街しづらいイメージがある。また、これから増加が予想される訪日外国人向けの総合的な情報発信が十分とはいえない。例えば、神保町を紹介するNPOなどのwebサイ

¹¹NPO 法人神田学会『KANDA ルネッサンス別冊』NPO 法人神田学会、2007年。

トはあるが、それは日本語版だけで、英語版がないところもある。また、主要な訪日外国人である台湾や中国向けの中国語案内や、韓国人向けの韓国語案内はさらに不足している。神保町周辺にはかつて中国の留学生が多くいたこともあり、中華料理店が多かったり、中国語の新刊や古書を専門で扱う書店も存在したりするなど、中国との関係が深いので、彼らを取り込むことができれば神保町のさらなる発展につながるのではないだろうか。以上の理由から、神保町全体の総合的な情報発信を行うことを第1の課題として指摘したい。

第2の課題として、神保町を活性化させる多くの団体を取りまとめる必要があることを指摘したい。第II節で取り上げた神保町の地域活性化の活動は、古書店店主連盟など、古書店街が中心となって行なってきたものである。しかし、神保町は古書店街以外にも楽器店街やスポーツ店街、さらには多くの飲食店がある。スポーツ店街には神田スポーツ店連絡協議会という組織があるが、楽器店にはこのような組織は存在しない。神保町の魅力である各専門店の連携を、同業者だけでなく、他の業種とも図ることができれば、さらなる発展へとつながる活動ができるのではないだろうか。また、各団体が神保町のために活動しているが、その活動実態を一般人が知ることは困難である。例えば、インターネット上でwebサイトを開設し、活動紹介をしている団体は多いが、そのサイトに行きつくことが難しい。このような団体も紹介できるような組織があれば、地域活性化活動をより一層促進することも可能だろう。

[2] 私たちの提案：「神保町に入口をつくろう」

以上のように神保町のより一層の発展を考えると、情報発信や組織化という点で課題があると考えられる。そこで、私たちは情報へのアクセスを容易にし、多様な団体を取りまとめるナショナル・トラストの結成を提案する。そして、外国語にも対応した神保町全体の総合情報サイトの立ち上げと、団体の取りまとめを具体的な活動として提唱したい。

まず、古書店、楽器店、スポーツ店、飲食店などの情報を一挙に検索できる神保町の総合情報サイトを立ち上げることを提案する。現在もNPOなどでこのようなサイトは運営されているが、そこに小さな団体のwebサイトのリンクを貼り付けておけば、より多くの人に見てもらえることになり、活動の周知も容易になる。また、このサイトを英語と中国語（台湾人向けの繁体字と中国人向けの簡体字の両方が必要）と韓国語に対応したものにすることで、日本人だけでなく外国人への情報発信も図れる。JNTOのデータによれば、2010年の訪日中国人の数は5年前と比較すると2.17倍、10年前の4.03倍と急増している¹²。観光庁は訪日中国人をさらに取り込むことを目標としており、2013年に390万人、2016年に600万人の中国人の訪日を目指している。また、中国人に限らず訪日外国人を2010年の約860万人から3000万人に増やす目標があり、それに向けた施策が行われているので、外国人向けの情報発信策として、webサイトの多言語化は必要であると考えられる。

¹²JNTO『訪日外客訪問地調査2010』結果概要。

(http://www.jnto.go.jp/jpn/downloads/110126_houmonchi2010_attach.pdf)

次に、ナショナル・トラストを結成して、これを核にした団体の組織化を図ることを提案する。これによって地域活性化活動の周知が効率よく行えるようになり、各団体との連携や資金を集めることが容易になるだろう。例えば、現在、千代田区ではまちづくりサポートとして、評価に値する活動を行っている団体に資金援助を行っているが、ナショナル・トラストを結成すれば、それが主体になって自ら資金集めをすることも可能になり、活動に幅が生まれる。また、個人経営の店舗が多い神保町では、店主の高齢化や後継者問題、さらには都心に立地することで生じる土地問題など、資金や人材の面での問題が懸念される。これらの問題に対する行政などの支援を求めるにあたり、個々のNPOや組合よりも大きな組織をもつナショナル・トラストの方が交渉力が強くなるだろう。さらに、各団体と社会とをつなぐ窓口となるナショナル・トラストが存在すれば、学生や大学も活動を知り、参加しやすくなる。例えば、訪日外国人観光客を誘致しても、個々の店では外国人への対応が難しいかもしれないが、神保町周辺の大学には外国語を学ぶ学生や外国からの留学生が多くいるので、彼らをボランティアやアルバイトなどで活かすことができるのではないだろうか。

他方において、ナショナル・トラストを結成することで現在のゆるやかな連帯がなくなり、各々が情報を発信し続ける神保町の独自性が失われる懸念もある。しかし、ナショナル・トラストが現状の各団体の活動を制限せず、周知活動や団体への助言・支援などを行なうことに終始すればそのような懸念は払拭されるだろう。つまり、シビック・トラストに近い活動で緩やかな活動の連携が神保町には適していると考えられる。

このようにナショナル・トラストを結成することで、各々が独自の活動を続け、情報を発信し続ける「東洋の文化発信基地」ともいべき神保町を、より活性化することができるだろう。

[3] 提案から考えるナショナル・トラスト活動の役割

以上のことから、私たちは神保町に情報発信と各団体を取りまとめるナショナル・トラストを結成すれば、明治時代よりさまざまな文化を発信してきたこの地域がいつまでも「東洋の文化発信基地」として発展していけると考える。この提案は「神保町の入口をつくろう」という表現に集約できる。来街者に情報発信基地となる総合情報サイトにアクセスしてもらうことが神保町への「入口」になり、さらに地域活性化活動もナショナル・トラストという「入口」を介して行うことでより大きな成果を挙げることができる。つまり、ナショナル・トラストがその地域と社会を結ぶ窓口の役割を果たすのである。そして、それは建物を守るだけでなく、地域に住む人や訪れる人が生み出す文化を守ることにともつながり、地域の持つ特性を活かし続けることを可能にする。ナショナル・トラスト活動で文化という人びとのライフスタイルを守るための活動もできるのではないだろうか。

IV 結論

一般に、観光資源保護というと、自然環境や文化財など、目に見えるものを守ることであるが、神保町の場合には、そこに流れる独自の雰囲気や訪れる人によって生み出される文化が保護すべき

対象である。そのためには建物や街並みを守るだけでなく、古書店街で見られるような、この地域を支えている独自のシステムや街を活性化させようとしている人びとの活動を支える続ける受け皿が必要となる。ナショナル・トラストという組織はその役目を果たせると私たちは考える。同時に、社会と地域をつなぐ窓口としての機能をもつことで、相互に支え合う関係が築ければ、歴史ある日本文化を発信するまちとして発展できるのではないだろうか。これが神保町にナショナル・トラストを組織することを提案する理由であり、目的である。そして、文化を守るナショナル・トラスト活動には、多様性があり、文化が生まれる土壌を守る緩やかな連携が必要と考えられる。それは地域の人びとが一つの目標に向かい、一体となって保護に取り組む今までのナショナル・トラスト活動とは異なるものかもしれないが、文化という個人個人のライフスタイルから生まれる自由な発想を生む環境を守ることにつながる。そして、そこから生み出された文化は日本が世界に誇る観光資源となり、多くの人を訪れることにより、また新しい文化が生まれる可能性がある。

【参考文献】

大内田鶴子・熊田俊郎・小山騰・藤田弘夫編『神田神保町とヘイ・オン・ワイ 古書とまちづくりの比較社会学』東信堂、2008年。
神田古書店連盟『神保町公式ガイド Vol.2』メディア・パル、2010年。
山田直哉『食い逃げされてもバイトは雇うな』光文社新書、2007年。
明治大学商学部『明治大学商学部広域連携支援プログラム活動報告書 2007』2008年。
NPO 法人神田学会『KANDA ルネッサンス別冊』NPO 法人神田学会、2007年。

【参考 URL】

神田スポーツ用品店協会 HP (<http://sports-kanda.com/goaisatsu.html>)
ナビブラ神保町 (<http://www.navi-bura.com/jimbocho/>)
千代田区観光協会 HP (<http://kanko-chiyoda.jp/tabid/73/Default.aspx>)
神保町へ行こう (<http://go-jimbou.info/>)
Book Town じんぼう (<http://jimbou.info/>)
Business Media 誠『古書店主が語る、ネット時代の古本ビジネス』
(<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1010/06/news014.html>)
JNTO『訪日外客訪問地調査 2010』結果概要
(http://www.jnto.go.jp/jpn/downloads/110126_houmonchi2010_attach.pdf)